

ふ。高貴

書  
後

(史林第八卷讀一覽、大正十一年十二月二日譯)

ふ。

想る。東洋の文化の發展、寺本君の全籍あるが如きの資本を失へば、殘念するに堪へむと思

干闕國體品目一章の末、印を數十頁の正字目録の封頭である東本四四才頁を除いて四四八頁の間の略二万餘じつ。史林第八卷第一號に口繪として載せた法成譯の釋迦牟尼如來像法滅盡之記について簡単なる解説を附けて置いたのが、石濱君及び武内君等の一讀を得て、武内君からは其の後法成譯の心經を收めた「心經七譯本」を寄贈せられ石濱君は特に本稿「法成について」を起草せられ、公刊に先立つて予に一讀の機會を與へられたことは、深く兩君に對して感謝する所であると共に、かく一二の君子にでも多少の興味を惹くのであつたならば、今少しく立ち入つて解説の筆を執るべきであつたと、坐ろに後悔の念に堪えぬ。居催促を受けて、たゞ坐右の備忘錄を使りに手早く書き附けたあの解説には、譯者法成の事、法成の此の記以外の譯經の事などについては、殆んど書き洩らしたのであつたが、幸に篤學なる石濱君によつて、現在法成の譯として知られ、若くは其の譯と認むべき佛典の名をこゝに集め得、更にその在世時代についても所依を知り得るに至つたのは同慶の至である。今茲に本誌の餘白を借りて狗尾を續ぐのは、一つには石濱君の厚志に添ひ、一つには囊に書き洩した無精の罪を償ふのに、最も適當な場合であると思ふが爲に外ならぬ。